

馬鈴薯に期待をかける北朝鮮

北朝鮮の外交官が、ペルーのリマにある国際馬鈴薯研究所（CIP）を訪れ、いくつかの新品種と、関係資料を持ち帰った1993年以降、研究所と同国との間では断続的に協力事業が行われてきたが、両者の協力はその5年後、CIPの種苗担当研究員が北朝鮮を訪れて以来急速に強まった。

ペルー出身のこの研究員は、北朝鮮の一般国民の生活実態に触れたときのショックをかくしきれず、次のように述べている。「私はいままでに、このような飢えと貧困に苦しんでいる人たちを見たことがない。私の出身国ペルーの高原に住んでいる人々はいかにに貧しい暮らしをしていて、日頃気の毒に思っていたが、北朝鮮の国民に比べれば、はるかにましである」。

北朝鮮は国際社会から孤立して、生産資材、エネルギーの供給などが十分でなく、農業生産の近代化が遅れ、しかもこのところ天候不順で災害の発生が多く、生産があがらず、年々相当の食糧が不足し、援助を受けている実状である。北朝鮮自身も、単に外国からの援助に頼るばかりでなく、何とかして自国での食糧自給率を高めようと、それなりに努力は払っているが、最近生産が比較的安定している馬鈴薯の増産に着目し、力が入れている。

国連食糧農業機関（FAO）によると、北朝鮮での馬鈴薯生産は1995年以降、主として栽培面積の拡大がはかられてから今日までに、4倍以上に増えている。いままではコメ、トウモロコシについて三番目に重要な農作物

となった。現在その栽培面積は約20万ヘクタールであるが、平均単収はヘクタールあたり9トンであって、近隣中国でのそれは、これより40%も多く、それだけに今後の努力と工夫で増収が見込まれる。

生産上の問題点はいろいろあろうが、もっとも重要なことは、この国に適した増収性をもつ品種がないこと、貯蔵管理が適切でないため、収穫後の減耗が大きいことである。CIPは、中国にある同研究所支部を通して、今後北朝鮮にこれらを中心とした技術提供を行う考えである。

北朝鮮からの報道によると、最高指導者金正日総書記は、農業の体験はないものの、馬鈴薯について、たいへん強い関心をもっていて、農民からイモ作りについての指導を受けている、とのことである。総書記は馬鈴薯が、いつか同国の食糧問題を解決するであろうと信じていて、いままで制限されてきた、農家にとってためになる技術援助に関する調査、視察など便宜提供を緩和している。

（Roger Cortbaoui, CIP研究員）

